

沖縄先史時代の赤色顔料関連資料（Ⅱ）

－ 北中城村萩堂貝塚・うるま市天願貝塚・地荒原貝塚出土品の再報告とサメ椎骨製耳飾をめぐる問題 －

山崎 真治

A report on red ocher use at prehistoric sites (II); materials from Ogido shellmound (Kitanakagusuku vill.), Tengan shellmound and Chiarabaru shellmound (Uruma city) with a problem concerning ear-plug of shark vertebrae.

Shinji YAMASAKI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第15号別刷

2022年3月31日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.15

March, 2022

沖縄先史時代の赤色顔料関連資料 (II)

一 北中城村荻堂貝塚・うるま市天願貝塚・地荒原貝塚出土品の再報告とサメ椎骨製耳飾をめぐる問題一

山崎 真治¹⁾

A report on red ocher use at prehistoric sites (II); materials from Ogido shellmound (Kitanakagusuku vill.), Tengan shellmound and Chiarabaru shellmound (Uruma city) with a problem concerning ear-plug of shark vertebrae.

Shinji YAMASAKI¹⁾

1. はじめに

数年来、筆者は沖縄の先史時代遺跡から出土する顔料関連資料について注意を払うとともに、数篇のレポート、論文をまとめる機会を得た(山崎2018、山城・山崎2020、玉榮ほか2021、山崎ほか2021)。従来知られていた沖縄の顔料関連資料は乏しく、その年代も縄文時代後期以降に限定されていたが、一連の調査研究を通して、新たに顔料が塗布された土器や装飾品を見出すとともに、顔料の処理工程で使用されたと考えられる石器類や顔料原料・顔料塊などの存在も明らかとなり、それらの年代も縄文時代前期を経て後期旧石器時代にまで遡ることとなった。すなわち九州以北と同様に、沖縄においても顔料利用は長い歴史的背景をもつ文化的行動だったと言えよう。

ところで、新型コロナウイルスが猛威を振った2021(令和3)年度に、筆者は企画展「海とジュゴンと貝塚人ー貝塚が語る9000年のくらしー」(会期:10月15日~12月5日)を担当し、その中で100年以上前に沖縄で発掘され、東京大学総合研究博物館に所蔵されていた北中城村荻堂貝塚、うるま市伊波貝塚・天願貝塚等からの出土品を借用し、展示する機会に恵まれた(山崎編2021)。これらの資料中には、複数の赤色顔料関連資料が含まれており、学史上重要な意義をもつものである。また、展覧会に係る調査研究の過程で、当館の考古陶磁器収蔵庫に収蔵されていた沖縄県内の貝塚出土品を再検討する機会を得、かつてうるま市地荒原貝塚から報告さ

れていた顔料塊の実物を再確認することができた。

そこで本稿では、東京大学総合研究博物館所蔵の荻堂貝塚、天願貝塚出土の顔料関連資料、および当館所蔵の地荒原貝塚出土顔料塊について再報告するとともに、二三私見を述べてみたい。

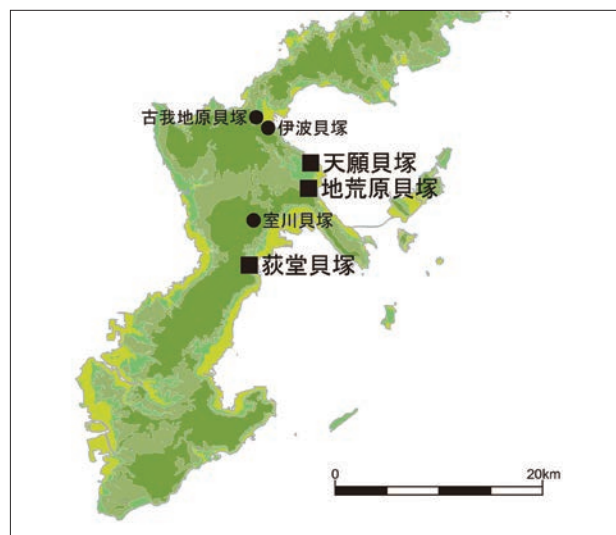


図1. 関連遺跡地図

2. 荻堂貝塚(北中城村)出土品

2-1 遺跡の概要

荻堂貝塚は、城嶽貝塚、伊波貝塚(チヌヒンチャ貝塚)、天願貝塚とともに1904年に鳥居龍蔵が沖縄島内で発見した貝塚の一つである(鳥居1905)。その後、1919年5月には松村瞭と川平朝令が荻堂貝塚の発掘調査を実施し、1920年には東京帝国大学理学部人

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

類学教室研究報告第三編として沖縄初の本格的な発掘調査報告書（松村 1920）が刊行された。現在、萩堂貝塚は沖縄における代表的な貝塚遺跡として著名であるばかりでなく、縄文時代後期の萩堂式土器の基準遺跡としても知られており、国史跡に指定されている。

萩堂貝塚の出土品は、現在東京大学総合研究博物館に所蔵されており、報告書掲載資料の多くが現存している（安里ほか 1997、石井ほか 2012、山崎編 2021）。

松村は萩堂貝塚の発掘報告書中において、サメ椎骨製装飾品について記載する中で顔料の付着を指摘しており（松村 1920）、これが沖縄における顔料関連資料の発見・報告の初例となる。今回、このほかに顔料が塗布されたウミガメ肋骨板を利用した骨製品を確認したので、合わせて紹介しておきたい。

2-2 顔料関連資料

A サメ椎骨製装飾品（図 2）

松村瞭によって顔料塗布が指摘された資料（松村 1920 第 7 図）で、「萩堂」「2871」の注記がある。直径 27mm、厚さ 15mm を測るメジロザメ科のサメ椎骨の中央部に、直径 13mm ほどの孔が穿たれている。側面には相対する位置に 2 個 1 対の孔があり（図 2 c・d）、これは椎骨に本来存在する孔（神経弓溝・血道弓溝）である。一方、これらの孔の間には相対して人為的なノッチが設けられており（図 2 e・f）、図 2 e ではノッチの中にさらに 2 個 1 対のピットが設けられている。松村はこのピットについて、「相対スル外側ナル孔竅（神経弓溝・血道弓溝のこと：引用者註）ノ間ニハ、人工ヲ以テ更ニ之ニ模シタル相並ブ二個の窪ヲ設ケ、之レト相対スル部分ニモ亦同様ノ窪ヲ施サント企テタルガ如キ痕跡ヲ有スルモノ。恐クハ窪ヲシテ中軸ニ達セシメン計画ナリシモ果サズシテ止ミシモノノ如ク、周囲ノ孔及ビ人工的窪ニハ極メテ微少ナレドモ赤キ色料ノ附着スルヲ見ル」と記載しており、松村の記載の通り、側面の両弓溝および人為的ピット部分に赤色顔料の付着がわずかに認められる。

B ウミガメ肋骨板製品（図 3）

報告書非掲載資料であるが、今回顔料の付着残存

を確認したので合わせて紹介する。ウミガメ肋骨板を短冊状に切り出し、端部に短いクランク状の作り出しを設けた骨製品で、「萩堂」「2870」の注記がある。長さ 92mm、幅 17mm、厚さ 7mm を測る。クランク状の作り出しに相対する端部付近に 1 孔が設けられ、この孔は側面に貫通している（矢印部分 X—X'）。両端部にも穿孔痕が確認できる（矢印部分 Y・Z）。長軸方向の両側縁に沿って擦切痕が残り、側面は海綿質を浅く削り込んで溝状に加工されている。この側面の溝状の部分を中心に、赤色顔料の付着残存が確認できる（図 3 c・d）。

3. 天願貝塚（うるま市）採集品

3-1 遺跡の概要

天願貝塚は、1904 年に鳥居龍蔵が沖縄島内で発見した四貝塚中の一つであり（鳥居 1905）、沖縄考古学のパイオニアとも呼ばれる多和田真淳^{たわだしんじゆん}が、考古学に関心を持つ契機となった遺跡としてもよく知られている（安里 2007）。遺跡は天願尋常小学校の敷地内にあり（現キャンプコートニー敷地内）、小学校建設の際に破壊されたようだが、公爵大山柏が 1920 年 4 月に伊波貝塚を発掘した際に、天願貝塚にも立ち寄り、その際に小学校から石器類を譲り受けている（大山 1922）。その後、伊波貝塚出土品とともに東京大学理学部人類学教室に寄贈され、現在まで保存されることになった。

今回紹介する資料は、伊波貝塚報告書巻末附録其二に「天願貝塚附近石器」として実測図が掲載された石器の一つ（S. W. 4）で、大山が「槌石」として報告したものである。報文中には触れられていないが、赤色顔料の付着が確認できることから今回再報告するものである。

3-2 顔料関連資料（図 4）

赤色顔料の付着した石器で、長さ 93mm、幅 63mm、厚さ 44mm を測る。石質は緻密な砂岩である。平面形はやや不整なタワシ形を呈し、上端部は欠損している。平坦な磨面（図 4 a）があり、両端に敲打痕が見られる。以下では便宜的に敲打石と呼称する。図 4 a 面右上には鉛筆のようなもので「時□」（□は仕あるいは住か）と注記されており、その他「天願小学校」、「No.5」、「S. W. 4」との注記が残る。

図 4a 面は顕著に摩滅しており、この面を中心に赤色顔料の付着が観察できる。一方、両端部には敲打痕が顕著に見られるが顔料の付着は明らかでない

(図 4d)。また、図 4c 面にはわずかに顔料の付着が及んでいるようであるが、図 4b 面では明らかでない。



顔料付着部拡大写真

図 2. サメ椎骨製装飾品 (荻堂貝塚)
東京大学総合研究博物館 所蔵



図 3. ウミガメ背甲板製装飾品 (荻堂貝塚)
東京大学総合研究博物館 所蔵



図4. 顔料付着敲石（天願貝塚）
 東京大学総合研究博物館 所蔵



図5. 顔料塊（地荒原貝塚）
 沖縄県立博物館・美術館 所蔵

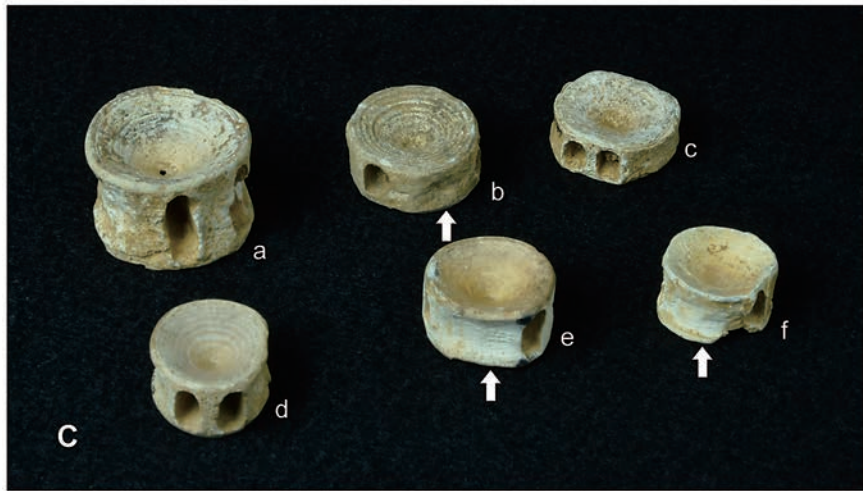
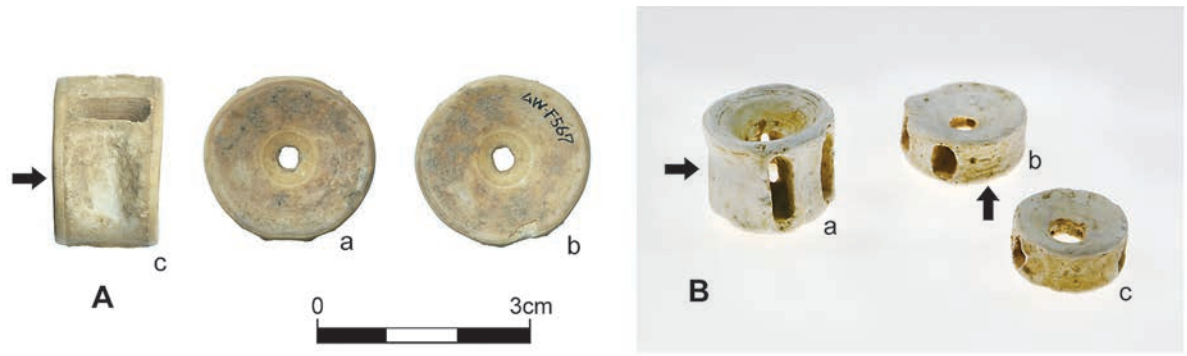


図 6. 関連資料

A・C：室川貝塚（沖縄市立郷土博物館 所蔵）、B：古我地原貝塚（沖縄県立埋蔵文化財センター 所蔵）

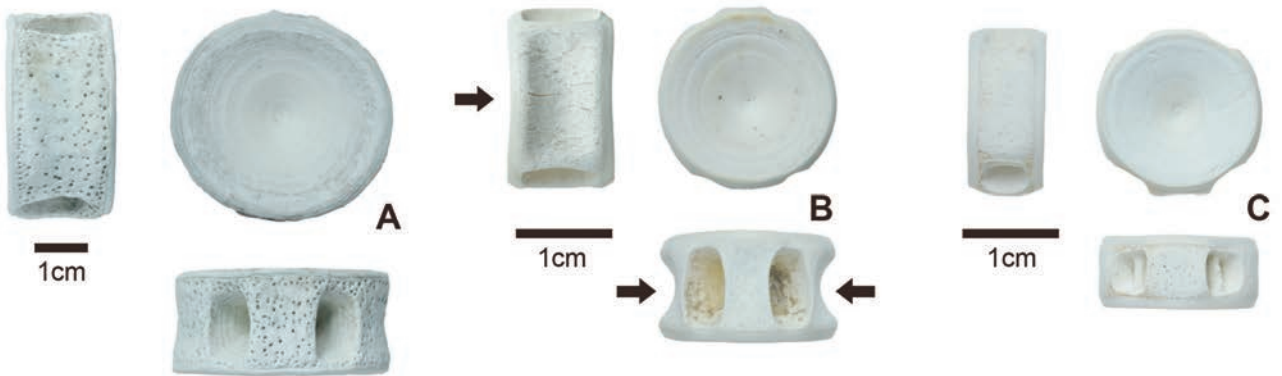


図 7. メジロザメ科 椎骨（現生標本）

A：多良間島採集品、B：屋久島一湊採集品、C：沖縄島北部採集品

以上のような付着状況から推測すると、図4 a面を使って赤色顔料の処理、具体的には顔料を磨り潰す作業などが行われた後、顔料処理ではない別の作業に伴って図4d面の敲打痕が形成されたと考えられる。

4. 地荒原貝塚（うるま市）出土品

4-1 遺跡の概要

地荒原貝塚は多和田真淳によって1933年に発見された貝塚で（多和田1956）、1955年8月に多和田真淳、外間正幸、嵩元政秀らによる発掘調査が行われた（多和田ほか1962）。その後、1982年および1984～1985年の緊急調査（具志川市教育委員会1983・1986）を経て、現在では遺跡現地は失われている。

4-2 顔料関連資料

今回紹介する資料は1955年調査時の出土品で、報文中では「顔料」や「紅殻様物質」として言及されており、しかも「他物に（塗りつけて）磨り減った形で出土した」と記載されている（多和田ほか1962）。

資料はU字状の平面形を呈する板状の小片で、「地荒原」の注記があり、長さ50mm、幅42mm、厚さ13mmを測る。元来長軸方向に長い形状だったものが半折したと見られ、上端は破断面となっている。全体に摩滅しており、特に図5 b面では非常に滑らかな平坦面が形成されており、多和田らが指摘するように、使用による摩滅ではないかと思われる（多和田ほか1962）。色調は橙色に近い赤色で、基質は細粒である。側面や断面では層状の構造が観察でき、この構造に沿ってクラックが入る特徴などから、湿地などで堆積物中に濃集した褐鉄鉱に由来するものではないかとも思われるが、詳細については今後の検討を待ちたい。なお、これまでのところ沖縄諸島における貝塚時代（縄文時代）の顔料塊の検出例はほとんど知られていないので（註¹）、今後の検討に資するために、今回写真とともに再報告するものである。

5. 考察

本稿で再報告した顔料関連資料から論じられるべ

き点は多くあると思われるが、紙幅の都合から、以下では特に松村瞭によって最初に報告された顔料関連資料である萩堂貝塚出土のサメ椎骨製装飾品を中心に、今回の企画展に係る資料調査の過程で気づいた点を踏まえて私見を述べてみたい。

サメ椎骨製装飾品の用途をめぐって

松村はサメ椎骨製装飾品の用途について、これが身体装飾に用いられたことは疑いないとした上で、内地の石器時代人が土製の鼓形耳飾を使用していたことを挙げ、「此ノ骨製装飾品モ亦之レト同様ナル用途ニ當テラレタルニハ非ザルベキカヲ推考セシムルモノアレド、若シ耳朶ニ穿孔シテココニ嵌入スルトセバ、折角ノ周囲ナル孔モ充分現ハルルコトナク、多少装飾ノ意義ヲ失フノ嫌ナキニ非ザレバ、果シテ耳飾ナリシヤ否ヤ将来ノ研究ニ俟ツ所多シト云フベシ」と述べている（松村1920）。現在では、サメ椎骨製装飾品を耳飾として着装した人骨の出土例も知られており、縄文時代にはサメ椎骨が耳飾として広く利用されていたことも明らかとなっているが（例えば高山2010）、上記の松村の記載は、サメ椎骨製装飾品と耳飾を結びつけたものとしては学史上最も早い時期のものと思われる。一方、松村が指摘するように、萩堂貝塚出土品が耳飾として耳朶の孔にはめ込まれて使用されたものであるとするならば、側面に意図的に彫り込まれたピットや塗布された顔料は、その意義を失ってしまうようにも思える（註²）。

上記の問題に関連して、筆者は沖縄のサメ椎骨製装飾品関連資料を観察する中で、椎体側面に萩堂貝塚例と類似するノッチが掘り込まれた事例を複数確認することができた。図6に示したものがそれで、室川貝塚（沖縄市）では、椎体中央に小さく穿孔されたサメ椎骨の側面に、ノッチが掘り込まれた事例があり（図6 A矢印部分）、さらに興味深いことに椎体中央に穿孔のないサメ椎骨においても、側面に同様のノッチが認められる事例（図6 C矢印部分）が存在することが確認できた（沖縄市教育委員会1997：報告書に直接の記載はないが、ノッチの存在を意識したサメ椎骨の図面が掲載されている）。これほど明瞭ではないが、古我地原貝塚（うるま市）でも側面に加工痕が見られるサメ椎骨製装飾品が複数確認できた（図6 B）（沖

縄県教育委員会 1987)。

このような椎体側面のノッチには、いかなる意味があるのだろうか。一つ考えてみたいのは、耳朶の孔に挿入する耳飾（いわゆる^{じせん}耳栓）として装着する際のストッパーとしての機能である。サメ椎骨、特にメジロザメ科の椎骨には、断面形がいわゆる滑車形というよりも円柱形に近いものもあり（図7）、側面にノッチを設けることで断面滑車形に近い形状を確保しようとした可能性が考えられるのではないだろうか。荻堂貝塚出土品では、図2中に矢印で示したように、側面にノッチを加えることで、断面滑車形に近い形状が実現されていることがわかる^(註3)。あるいは、メジロザメ科の椎骨には、椎骨側面の孔（神経弓溝・血道弓溝）の中間部分に凹部をもつものもあり（図7 B 矢印部分）、そのようなものを意識している可能性もあるかもしれない。

仮に、上記の想定が正しいのならば、サメ椎骨製耳飾には、椎体中央に孔を穿ったものだけでなく、孔のないものも存在し、両者はともに耳朶に穿った孔に直接挿入して使用されていた可能性が指摘できる。ただし、松村の指摘にあるように、荻堂貝塚例は側面にノッチに加えて2個1対のピットが穿たれ、このピットおよび神経弓溝・血道弓溝内に赤色顔料が残存しており、この点についての説明が求められよう。筆者の考えは以下のようなものである。すなわち、荻堂貝塚例は当初、側面にノッチを設けた状態で、耳朶の孔に挿入する耳飾りとして使用されたが、その後、2個1対のピットが追加され、赤色顔料が塗布された。このピットは、松村が指摘するように両弓溝を模したもののように見受けられるが、貫通しておらず盲孔となっており、ジャウンブ山の事例（Wright et al. 2016）のようにピット内に顔料が詰め込まれていた可能性もある。追加された側面のピットや塗布された顔料は、耳朶の孔に挿入して使用した場合には、松村が指摘するようにその意義を失ってしまうことから、再加工後は椎体中央の孔に紐を通して垂下する垂飾品として使用されたのではないだろうか。頸飾のようなものでも良いだろうし、耳朶の穴から吊り下げられるタイプの耳飾として利用された可能性もありうる。仮に、耳飾が人から人に受け継がれる継承品であったならば、各人の耳朶の孔のサイズの違いで使

用方法が変化することもあったかも知れない。以上の説明は多分に空想を交えたものであるが、一つの仮説として今後の検討を要するものであろう。

おわりに

本稿では、東京大学総合研究博物館所蔵の荻堂貝塚、天願貝塚出土の顔料関連資料、および当館所蔵の地荒原貝塚出土顔料塊について再報告するとともに、特に松村瞭によって報告された荻堂貝塚出土のサメ椎骨製装飾品について再検討した。他遺跡における類例との比較検討の結果、荻堂貝塚出土品が、当初耳朶の孔に挿入して耳飾として使用された後に、再加工されて別種の垂飾品として使用されたという仮説を提示した。また、沖縄におけるサメ椎骨利用の耳飾には、椎体中央に孔のあるものとなないものが並存し、両者ともに耳朶の孔に挿入して使用された可能性を指摘した。

沖縄においてサメ椎骨の出土例は、約7000年前の縄文時代早期の野国貝塚群B地点（沖縄県教育委員会 1984）や、約1万～9000年前のサキタリ洞遺跡の事例まで遡る（沖縄県立博物館・美術館 2018）。また、椎体に穿孔したサメ椎骨の出土例は、約4000年前の古我地原貝塚以降多く知られている。一方、サメ椎骨製装飾品の使用方法を示唆する人骨等の出土例は知られておらず、これらがどのように使用されたものか、明確な見解は示されていない。木下尚子は沖縄・奄美には耳飾が分布しないという観点から、九州と沖縄・奄美の装身文化の差異を論じているが（木下 2005）、本稿の論点を踏まえるならば、この点については再考の余地があるだろう。

また本稿で指摘したように、椎体に穿孔がなく、側面にノッチを施したものが耳飾として使用されていたとするならば、これまで単に動物遺体として扱われていたサメ椎骨の中にも、耳飾として使用されたものが含まれているかも知れない。今後の類例の追加を期待したい。さらに、例え側面にノッチがなくても、サメ等の魚類の椎骨を耳飾として使用することは可能であり、沖縄においても、耳飾文化はさらに古く遡る可能性も否定はできない。

上記のように、沖縄では耳飾としてのサメ椎骨製装飾品は、古我地原貝塚（沖縄県教育委員会 1987）

などに見るように縄文時代後期以降明確化するようである。耳飾の着用は、抜歯や文身（入墨）と並ぶ身体加工の一種であり、日本列島の縄文人の間で広く行われていた風習と言って良い。沖縄における抜歯風習もまた、具志川島遺跡群（伊是名村）など縄文時代後期以降に明確化するようであり（松下・太田 1993）、沖縄における身体加工文化史上、縄文時代後期が大きな転換点となっていたことが窺える。

一方、沖縄における文身（入墨）風習については、現在のところ明確な考古学的証拠を提示することは難しい。しかし魏志倭人伝には、倭人の男子は皆黥面文身して大魚水禽の害を避けると記されており、九州北部と同様に潜水漁が盛んだったと考えられる沖縄でも、先史時代に文身（入墨）風習が存在していた可能性は高いと思われる。文身（入墨）風習との関連を考えてみたい遺物の一つに、沖縄・奄美において縄文時代後晩期を中心に出土例が増加する九州産黒曜石がある。その多くは佐賀県伊万里市に所在する腰岳産であり、九州では打製石器の素材として多様な石材が利用されているにも関わらず、南島では腰岳産黒曜石が特別に好まれていたことがわかっている（小畑ほか 2004）。腰岳産黒曜石の鋭利な切れ味は、入墨の際の皮膚の切開において、他の石材に勝る優位性を持っていたのかも知れない^{（註4）}。合わせて、縄文時代後期には蝶形骨製品をはじめとして、彫刻的な文様をもつ器物が出現することも見逃せない（例えば伊藤 2013、島袋 2016、山野 2010）。土器、石、骨、貝など、素材を越えて共通あるいは類似するモチーフが施されることもあり、特定のモチーフに対するシンボリズムの高まりを思わせる。以上に指摘した論点は、現状では単なる空想の域を出ないものであるが、沖縄・奄美における腰岳産黒曜石に特化したフローシステムの背景を説明する一つの仮説となりうるのではないだろうか。

本稿で取り上げたように、荻堂貝塚出土のサメ椎骨製装飾品に関する 100 年前の松村瞭の記載は、今なお重要な論点を内包しているように思われる。ここで示した視点が、今後の身体加工文化研究に多少なりとも益するところがあれば幸いである。

本稿をまとめるにあたり、以下の方々ならびに関係機関には写真等の利用について便宜をはかってい

ただくとともに、有益なご教示を賜りました。

沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄市立郷土博物館、海部陽介、菅原広史、東京大学総合研究博物館、縄田雅重、山本正昭

また、島袋春美氏には草稿段階で目を通していただき、貴重なご助言を賜りました。上記の方々ならびに関係機関の皆様には、末筆ながら記して謝意を表します。

註

- (1) 旧石器時代の顔料塊や顔料原材としてはサキタリ洞遺跡出土品がある（山崎ほか 2021）。
- (2) 顔料が塗布されたサメ椎骨製装飾品の事例として、オーストラリアのアーネムランドにあるジャウンブ山塊の岩陰出土品がある（Wright et al. 2016）。この事例では直径約 5 mm の椎体中央に径 1.5 mm 程度の孔が穿たれたサメ椎骨が 6 点得られており、いずれも全面に赤色顔料が塗布されていた。神経弓溝・血道弓溝にも顔料が詰め込まれたような状態となっており、Wright らは使用痕の状態から、これらが椎体中央の孔に紐通して連ねるビーズとして使用されたと推定している。
- (3) 九州以北におけるサメ椎骨製品の類例については文献渉猟が不十分であるが、管見の範囲内で注目された事例を記載しておく。黒橋貝塚（熊本県）では、サメ椎骨の中央に孔を穿ち、周囲に研磨を施したものが多くあり、加えて周囲に溝を切り込んだ例も複数報告されている。さらに重要な点として、周囲に使用による摩滅が観察できる例もあると言う（高木・木下 1998）。本稿で取り上げた側面ノッチとは形状がやや異なるが、類似した加工手法と思われるものであり、使用痕の存在から、耳飾としての使用が明確な事例と言えよう。このほか、一尾貝塚（熊本県）でも中央孔と側面研磨のあるサメ椎骨が耳飾として報告されており、「滑車形に整形したものもある」ことが指摘されている（山崎 2000）。
- (4) 北海道のアイヌの間では、かつて入墨の際に

黒曜石が使用されていたと言う（吉岡 1996：120頁）。

参考文献

- 安里嗣淳 2007『『多和田編年』成立の背景と後期区分の再評価』『南島考古』26
- 安里嗣淳・丑野毅・小田静夫・新里康 1997「東京大学総合研究博物館所蔵の沖縄関係考古資料写真一覧」『沖縄県史料編集室紀要』22
- 石井龍太・佐宗亜衣子・諏訪元 2012『東京大学総合研究博物館人類先史部門所蔵荻堂貝塚出土土器・石器標本』東京大学総合研究博物館標本資料報告92 東京大学総合研究博物館
- 伊藤慎二 2013「平敷屋トウバル遺跡の線刻石板をめぐる謎」『別冊太陽 縄文の力』平凡社
- 大山 柏 1922『琉球伊波貝塚発掘報告』（1982復刻 第一書房）
- 沖縄県教育委員会 1984『野国－野国貝塚群B地点発掘調査報告』
- 沖縄県教育委員会 1987『古我地原貝塚』
- 沖縄県立博物館・美術館 2018『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書I』
- 沖縄市教育委員会 1997『室川貝塚－沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書』
- 小畑弘己・盛本 勲・角縁 進 2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の科学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources』4 石器原産地研究会
- 木下尚子 2005「縄文時代二つの装身文化－九州・奄美・沖縄の装身具比較－」『第15回九州縄文研究会 沖縄大会 九州の縄文時代装身具』資料集九州縄文研究会沖縄大会実行委員会
- 具志川市教育委員会 1983『地荒原貝塚・苦増原遺跡』
- 具志川市教育委員会 1986『地荒原貝塚－個人住宅建築工事に係る発掘調査報告－』
- 幸喜 淳 2019「尚家文書に記された琉球産弁柄と久志のカイミジ」『首里城研究』21
- 島袋春美 2016「蝶形骨製品と獣形貝製品に見る沖縄先史人の精神性」『特別展 港川人の時代とその後－琉球弧をめぐる人類史の起源と展開－』図録沖縄県立博物館・美術館
- 高木正文・木下尚子 1998「骨角貝製品」『黒橋貝塚－浜戸川中小河川改良事業に伴う埋蔵文化財の調査』熊本県教育委員会
- 高山 純 2010『民族考古学と縄文の耳飾り』同成社
- 玉榮飛道・久貝弥嗣・山崎真治 2021「沖縄先史時代の顔料関連資料－伊江村具志原貝塚・宮古島浦底遺跡からの報告－」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』14
- 多和田真淳 1956「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧 1956年版』琉球政府文化財保護委員会
- 多和田真淳・外間正幸・嵩元政秀 1962「地荒原貝塚発掘報告」『文化財要覧 1962年版』琉球政府文化財保護委員会
- 鳥居龍蔵 1905「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」『東京人類学会雑誌』227
- 松下孝幸・太田純二 1993「沖縄県具志川島遺跡群出土の古人骨」『具志川島遺跡群』伊是名村教育委員会
- 松村 瞭 1920『琉球荻堂貝塚』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第三編 東京帝国大学（1983復刻 第一書房）
- 山崎真治 2018「サキタリ洞遺跡調査区Ⅱ出土の砂岩礫に認められた赤色付着物」『サキタリ洞遺跡発掘調査報告書I』沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治編 2021『企画展 海とジュゴンと貝塚人－貝塚が語る9000年のくらし－』図録 沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治・澤浦亮平・黒住耐二・藤田祐樹・竹原弘展・海部陽介 2021「サキタリ洞遺跡の貝製ビーズと顔料利用に関する新たな知見－沖縄の旧石器文化をめぐる特殊性と普遍性－」『旧石器研究』17
- 山崎純男編 2000『一尾貝塚』五和町教育委員会
- 山城安生・山崎真治 2020「沖縄県北谷町伊礼原E遺跡出土の赤色顔料付着土器とガラス質安山岩製石鏃」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』13
- 山野ケン陽次郎 2010「琉球列島出土彫画貝製品の製作技術に関する研究」『熊本大学社会文化研究』8
- 吉岡郁夫 1996『いれずみ（文身）の人類学』雄山閣

Wright, D., Langley, M. C., May, S. K., Johnston, I. G., Allen, L. (2016) Painted shark vertebrae beads from the Djawumbu–Madjawarrnja complex, western Arnhem Land. *Australian Archaeology* 82 : 43–54,

